

第十三回 『あ』の集い』 講話テキスト1.

● 『はじめに』

二〇一〇年一〇月一〇日〜一一日

於・関西セミナーハウス

第十三回 『あごらの築い』 講話テキスト2.

● 『真つ当な自我・歪んだ自我』

二〇一〇年一〇月一〇日〜一一日

於・関西セミナーハウス

「イエスが与える平安」への開眼を願って

松 下 昌 義

○ はじめに

イエスは言われた。

「平安をあなた方に残し。わたしの平安をあなた方に与える。私はこれを、世が与えるように与えるのではない。心をかき乱されるな。おびえるな」。

「父なる神が、わたしの名によってお遣わしになる弁護者である聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、私が話したことをことごとく想いおこさせてくださる」。

—ヨハネ福音書十四章二六節・二七節—

「あごらの集い」の願いは、イエスが証示された「平安」（存在の根源）を各自が直接経験し、自覚的に参与し、イエスが生きた「平安」を生きることにある。

イエスが証示された「平安」は何か。それは、人生に於ける「この世内の閉ざされた個人の平安」でなく、この世の全存在が「於いてある」開かれた根源的で創造的な大いなる命のたぎり、即ち、神の大いなる命のはたらきその場のリアリティーそのことである。

イエスはただ「平安」とは言わず、「わたしの平安」と言われる。極めて具体的身心的である。それは「わたしが・持っている・この世内の平安ではなく」「わたしに先立ってすでに働いている・わたしの平安」のことである。つまり「平安が・主体である・わたし」であり、または「平安が主語で・わたしが述語である・わたし」である。

では、イエスが証示される具体的身心的な「わたしの平安」とは何か。それはイエスをイエスとして立たしめ、生かし言動させている根源的な神のはたらきそのコトとしての命であり力（デユナミス）にはかなない。

「わたしの平安をあなた方に与える」とは、ただ「平安」という抽象的な観念、または、教義的概念を自我レベル（主・客の関係）で、AからBへ教える「教え」として与えることではない。ましてや、教えられた教え（教義）を妄信して受け取り、その気になることでもない。（ロマ書、一〇・一〜三）

「わたしの平安をあなたに与える」とイエスが証示するとき、それは、イエスをイエスとして生かしている創造的な大いなる命のはたらき（リアリティー）である「平安」の働

きの中へ、あなたの自我を溶解させ、平安として生かす！」という、出来事である。それは、まさに神の創造的息吹（霊）の発動である。この出来事が「与える」ということである。その意味で、この「平安」のリアリティーは、教義を超えており、教義以前の超越的な創造的な神の大いなる命のたぎり（はたらき）そのコトである。

ここで、ヨハネ福音書二十章に記されてある一つの出来事を思い出す。それは、当時体制化したユダヤ教の宗教権力は、イエスを「体制を揺るがす異端の頭」と見做なし、弟子の一人ユダを陰謀をもって買収し、彼の手引きでイエスを逮捕した。そして公衆の面前で十字架刑で惨殺した。導師を失った弟子たちは不安と恐怖でおびえていた。そのとき突然、彼らの真ん中に復活のキリストが顕現し「あなた達に平安。霊を受けよ！」と告げ、息（神の霊）を弟子達に吹き込まれた。

弟子たちは、この経験をとおして存在の根源的命、即ち「平安」を自己の存在の根柢で自覚し、開眼させられたのである。つまり、弟子たちはイエスの「わたしの平安」のリアリティーの真の明るさと開けとを、自己の存在全体で直接経験し自覚したのである。

このように、霊の息吹を全身心で受容することで、存在の根源的な明るさと真の命の開けの場（平安）に開眼した弟子たちは、その「平安」を人々に分かち合い共有すべく宣教へ立ち上がった。

不安と恐怖に怯える弟子たちが、復活のキリストから靈の息吹を受けたとき、弟子たちに何が起こったのだろうか。端的に言えば、弟子たちの自我の世界が破れたのである。そして、自我の世界が「於いてある」真の命の世界、真の明るさの世界が開示され、その真の命、真の明るさに包まれ、溶解させられてある真実の自己に開眼したのである。そのリアリテイの経験と自覚を直接経験というのである。この一事に開眼することが、人間が「本来の人間になること・自分が自分として生きること」なのである。したがって、その他のことは、すべて「これ以後の事・この世内の事」にすぎない。イエスが証示された「なくてはならないこと」とはこの一事である。(ルカ福音書一〇章三八〜四二節)

靈の息吹を受けた弟子たちは不安と恐怖を突き抜け、宣教へと身を転じた。その宣教とは、自己の全存在に満ちあふれた平安、即ち、真の命の明るさと無限の開きに、すべての人々と共に参与する、という靈的な促しであり、また、その促しに応える人の側の願いごころの活動だといえる。したがって、このキリスト(大いなる命)に自覚的に開眼している者こそが宣教者であるといえよう。

「聖書は神の言葉であり、イエスは救い主である」という、既に出来上がり正統化され

た教会公認の教義を信する自我の確信を出発点として、宣教することは、ただの「キリスト教という宗教」の教えを信じて担ぎ回るだけとなる。それは一種のイデオロギー化した観念の伝搬者にすぎない。それは、第一のことではなく、第二の事柄に属すことであって、その内容は第一の事柄の一つの方便、又は述語的（説明的）内容の事柄にすぎない。

第一の事柄とは、世界を「於いて」有らしめている根拠・根源としての創造的な神の命のたぎり（はたらき）そのコトである。イエスはその命を「先ず求めよ」と証示された。「求めよ」とは「氣づく・開眼する」という意味である。（マタイによる福音書六章三三節）この第一の「神の創造的な命のたぎり」のリアリティーをイエスは、野に咲く一輪の花、空に鳥が飛ぶ姿（形）に見、さらに、人間が存する脚下に洞察した。

しかし、それら存在者そのものは、神の創造的な大いなる命その事との関係で言えば、第一の超越的コトのこの世に於ける方便・表現・道具としての第二のコトである。その意味で、第二のコトを第一のコトとして認識することは、一種の偶像崇拜の類となる。したがって、聖書も、聖書に基づいて教義化されたそれも、「キリスト教」という「宗教」も結局は第二のコトにしかすぎないのである。

にも関わらず、解釈されたそれを、第一のコトであるかのように思い込み、唯一絶対の

真理と確信し、独善的、排他的に所かまわず出かけて行き、相手の文化も伝統も習慣も宗教も否定し破壊して、自分たちが確信する宗教信仰で統一してしまう暴挙を、神の名で遂行することを宣教と想ってきた。それは、主観主義的宗教我の暴挙のなものでもない、と言えるのではないか。

その独善と排他的唯一絶対主義のキリスト教会の在り方が、かってイエスが律法主義的ユダヤ教を問うたように、今日、根本から問われているのである。

それなのに、一向にその暴挙に気づこうとしない人達がいるのはとても残念なことである。それは、彼らがイエスが証示する第一の命のリアリティーに開眼しないままで、第二の道具的な教義を唯一の真理と確信する自我信仰から開放されていないからだと思う。それが、「聖書絶対主義」の根本的な誤りである。まさに「文字は人を殺し、霊は人を生かす」である。(コリントの信徒への手紙Ⅱ、三章六節) 彼らの熱心さは、結局、神の義と自分の義とを混同してしまった信仰理解なのである。(ローマの信徒への手紙、一〇章一節〜四節、参照)

イエスが証示した真の命の明るさと開けの「平安」の世界は、宗教的真實のリアリティーの根源の場である。それはすべての存在者に先立つ一切(科学・哲学・芸術・宗教・思

想・人の計らい)以前の超越的な大いなる命のリアリティーなのである。そして、その命のリアリティーの場では、われわれが称する「神」も「仏」も無い。ただ、創造的な大いなる命がだぎっているだけの「絶対の無」「絶対の空」、否、そのように言表するそれも無い。まさに、初めもなければ終わりもない、増えもせず減りもせず、そのまんま開かれたスツカラカンのカンである。イエスはその根源的、創造的な命のたぎりのその場を「隠れた所」と証示された。(マタイによる福音書六章六節)

この真の命の現場を見据えるとき、人は、一切の思考を捨ててただ、そのまま立ち[↑]竦み、徹底した自己放下あるのみ。この真の命の現場に開眼したマイスター・エックハルトは、「神について一切口を開くな。神について語るならば、それは虚言である」「神も信仰も捨てよ!」と告白している。彼は、真の光の明るみの内で悦樂している。「なんと幸いなことか!、心の貧しい人達、神の大いなる命の平安はその人たちのものである」と証示なさるイエスの声が聞こえて来る。(マタイによる福音書五章三節)

人の知恵によってではなく、靈のことは靈によって解釈する。神の靈以外に神のことは知ることはできない。とパウロは言った。(コリントI、二章六節以下)だからこそ、イエスは弟子達に「靈の息を吹き込まれた」。パウロも宣教について次のように語った。

「あなた方に、どうしても会いたいのは、「靈」の賜物を分かち与えて、へ真の平安・

眞の命の明るさに開眼することの力になりたいたいからです。あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、励まし合いへ一緒に歩みたいのです」（ロマの信徒への手紙、一章一一・一二節）

これは、イエスやパウロが求める「教会（エクレシア）」である。教会とは、所定通りの礼拝儀式を行うことで、情緒的我的満足を得るところではない。ましてや、仲良しクラブのような気の合った者同志が、何でも楽しく語り合う、つかのまの不満解消の場でもない。

教会は「霊」の賜物、即ち、眞の平安・眞の命の輝きに開眼し、共にその命のはたらきに参与させるために、聖霊が起し給うた求道と交わりの場である。この一事への靈的な自覚を失った教会は、すでに非教会化しているのではないだろうか。今日、教会は深く自らを省みる事が求められている。

「外面的な事物の内に平安を求めような人たちは、すべて正しく求めてはいないのである。求めて遠くへ行けば行くほど、求めているものが益々見出し難くなるのである。道を間違った人のように、行けば行くほどますます迷う」（エックハルト） そのような人は、結局、自我から求める人であり、いつも不満と怨念を自分の内に持ち、誰かを非難することで自分を維持しているエゴイストとなる。

人が平安を得るための唯一のなすべきことは、過去の出来事を含め、一切を捨てることである。だが、どれほどのものを捨てたとしても、その人が自分自身を保持しているなら、つまるところ、その人は何も捨ててはいないのである。このことについてイエスは明確に次のように証示なされた。

「はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。おのが命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、永遠の命へとそれを保とう。わたしに仕えたければ、わたしに従え。わたしのいるところ、そこにこそわたしに仕える人もいることになる。だれかがわたしにつかえるなら、父ちゃんはその人を尊重するであろう。（ヨハネ福音書一二章二四節〜二六節）
イエスが証示される霊的な意味は深い。

「自分を捨てて、私に従いなさい」と証示するイエスの言葉を人が聞くと、それを正しく聞くことができず、更なる惑いに陥る。それは、結局、「自我からの発想」しか出来ず、その自分に縛られ身動き出来なくなるのだ。そのような「自我による信仰の人」になっ
てはいけないと思う。

福音書には、上記のような「自我による信仰の人」の典型的な出来事が幾つか記されているが、次の二つの出来事に注目していただきたい。（マルコ福音書一〇章一七節以下・

以ルカによる福音書一二章一三節以下)

さて、信仰の靈性、教会の靈性について語られるとき、熱狂的な信仰や熱狂的な礼拝を行う教会を、靈的な信仰、靈的な教会だと思っている人達がいる。そのような教会や礼拝の現象を、どのように見るかは、ここでは取り上げない。ただ、その「靈的」と言うことが自我の枠内で生じている単なる感情的な言動を、自我を突破した神的な命のはたらきの場から生起した、真の靈性の開示であるかのように、本人達が思い込んでいるなら、結局、その靈性とは、単なる自我が作り出す幻想に自縛されているに過ぎないと言える。

【さらなる問題点の一つは、靈の働き、靈が語らせる言葉、他界から発信されて来ると言われる「靈」(チャネリング)等について、一九六〇年代以降トランスパーソナル他二ユーエイジ、ニューサイエンス運動(新靈性運動)がイギリスやアメリカで起こり、日本にも波及している。これらについて識者達はその「靈という主語」とは何かと、真面目に問うているようである。】

それにしても、熱狂的信仰集團の多くは、独善的、排他的、自宗教絶対化を主張する。自我が極度に膨張するとき現れる典型的な現象である。しかし、本人たちは自分が、自我

膨張の魔に落ち込んでいることに気づかない。それを指摘する者を撃滅すべき悪魔だと信じて疑わない。まさに「宗教化現象・統一化現象」そのものである。

さて、こころ騒がせ、不安の内にはた弟子たちの真ん中に、突然、復活のキリストが顕現し、創造的な大いなる命(平安)を、お前の内に発動させる!と、霊を吹き込んだ。その出来事は弟子たちの信仰の枠を撃破し、彼らの信仰の極限の外、即ち、この世を超え包む限らない開け、真の命の明るさへ開眼させる神的・霊的な力の顕現事であった。

真の霊の付与は、徹底的に「わたしの信仰」を一掃し、絶対無、絶対空の命の開けに開眼させる。イエスは、一切のユダヤ教の伝統(モーセの律法)によらず、この世を超えて包む「父ちゃん」の開けと明るさの命を直接生きた。そして、証示された「天の父ちゃんは、悪人にも善人にも雨を降らし太陽を照らしてくださる。ホーイホーイ!」と。

真の宗教的な自己否定は、「自分の信仰」を消滅させ、この世を超え包む限らない開けの命の場に新生させる。「古きは過ぎ去り、見よ、新しくなりたり」とは、真に超越的な大いなる命の体験と自覚の迫りによる自己否定であって、決して、この世内の延長上に生ずることではない。新生は本来の人間への開眼である。人はそのとき、まさに人間になる。その意味でイエスが「わたしはこれを、世が与えるような与え方ではない。心を騒がせる

な。おびえるな！」と言われたその証示の秘密が領解できる。

イエスは、人々を「キリスト教」という一つの「宗教組織」に属するメンバー（会員、信徒）となることを求められたのではない。宗教組織のメンバーに成ることと、神の創造的な大いなる命、即ち「平安・真の命の明るさ」に開眼し、参与することとは直接関係ない。それどころか、宗教組織の信徒（メンバー）に成ることによって、組織が持つ教義の子になり、宗教的自我（独善と排他性と偽善性）が肥大化することで、真の平安、真に開放された大いなる命の明るさを失うことになる。「所謂宗教」がいつも直面し随伴している見えない魔の落とし穴である。（ヨハネ福音書一章一節〜四四節・中心は二三節〜二六節・マタイによる福音書、二三章一三節以下）

イエスは、その「宗教の魔」を当時のユダヤ教団に見ることで、何が問題であるかを指摘した。しかし、先述のとおり、結果は、教団側の宗教的な独善的権力で、イエスは「神に敵する悪魔の頭にとりつかれた者（マルコ三・二二）」と決めつけられ、最後に神の名によって十字架刑で惨殺された。いったい彼らが崇める「神」とは何なのだろうか。結局、彼らの神とは、その宗教エゴが作り上げた神にはかならないのではないだろうか。

この類はキリスト教会内の歴史だけを振り返っても、巨大な権力を掌握した教会が真摯に求道する多くの信仰人を「教会が崇める神の名によって」火あぶりの刑で惨殺し、それでもなお足りずに火刑の後、死者の遺灰を川に投げ込み捨て、神の愛と恵みを贅美した。これを、悪魔のわざと言わずに何というべきであろうか。「宗教エゴ」は、信仰を「狂気の信仰・狂気の人間」に陥溺させる。これが宗教の「魔」である。

それにしても、神の名によって惨殺した、真摯な求道の人を、何百年も経た後、教会はこれまた、神の名によって、名誉を回復し聖人に列した。一体、「宗教教団の神」は、己の勝手な都合で人を殺したり生かしたりのか。まさに「神学とは人間学」であると談じられても致し方ないと思う。

「宗教」の問題は深い。その深さは人の心の深さに比例する。人の心とは人間の意識的自我（エゴイズム）の深さである、それは、見えるものに対する執着と見えないものに対する恐れ^のの深さである。この矛盾的存在がこの世に生きる人間の現実存在である。

見えるものに対する執着は「我」に執着する我執を生む。そして我執は我見・我慢、つまり、自己主張と傲慢^{ごうまん}の心を生み、我れに執着する利己的人間（エゴイスト）となる。

そして彼は、そのような「我れの姿」に気づき知る事が出来ない我痴人間に極まる時、神も仏も自我の中へ取り込み、自我実現のために利用する徹底したエゴイストとなる。そのとき「人も・宗教も」エゴという魔に陥ちる。聖書はそれを的はずれ（罪）と言った。

人間は意識的自我の持ち主である、つまり、自他を意識的に見る事ができる者として創造されている。これは神が人間に与えて下さった賜物である。しかし、その自我の賜物をどのように行使するかが、人間に課せられた一大課題である。ここに自我を暗さに閉ざすか、即ち、歪んだ自我、つまり的外れ人間と化すか、明るみへ開放するか、即ち、真つ当な自我と化すかの別れ道である。

独裁的政治権力者へロデ王は、兄弟の妻を奪取した。そのことを王の横暴として弾劾したバプテスマのヨハネを、へロデ王は逮捕、最後にヨハネを断首の刑に処した。王はそれだけでなく、外国の高官の居並ぶ宴会の席にヨハネの首をさらしものとして出した。

この悲惨な事件をマルコ福音書は記しているが、その時のへロデ王と奪取された兄弟の妻へロディアの心を次のように記している。

「へロデは、ヨハネを捕らえさせ、牢に繋いでいた。ヨハネが、『自分の兄弟の妻と結

婚することは、神の律法で許されていない』とヘロデに言ったからである。そこで、ヘロディアはヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、できないでいた。なぜなら、ヘロデが、ヨハネは義しい聖なる人であることを知って、彼を恐れ、保護し、また、その教えを聞いて非常に悩みながらも、なお喜んで耳を傾けていたからである。」（マルコ福音書六章一四節〜二九節）

この出来事は、実に、人間存在の矛盾を鋭く示している。ヘロディアの内心の思いもさることながら、ヘロデのヨハネに抱く思い「ヘロデは、ヨハネを義しい聖いなる人であると知って、彼を恐れ、彼を保護しながら、彼をどのようにすればよいか、悩みながら、喜んでその言うことを聞いていた」のである。だが、結果的には、ヘロデは自分を自我の暗闇に閉じ込め、悪魔の道へ誘われて行ったのである。

これは、単なる人間の善悪のこととして済まされない極めて人間的な出来事であり、人間の意識的な自我（自分）にひそむ根本の闇である。人が、否、人類が底知れぬ奈落の暗闇に埋没するか、平安に満ちた開けと明るさに身を置くかの問題である。

なぜ、ヘロデは暗闇の道へ落ちて行ったのだろうか。彼は、日頃、ヨハネの言うことを

「悩みながら、喜んで耳を傾けていた」。これが人間の誰もが持つ矛盾である。この自我が秘めている矛盾をどのよう克服するか、人間の歴史はこの大問題に対して様々知恵を傾け解決を探ってきた。しかし、未だに解決されてはおらず、今も、その矛盾の悲惨さの中で人類は惑い続けている。

それにしても、私たち人間の自我が歪むこと、本来の道から迷い出ること、これは自我の宿命とも言える。なぜなら、「私は、私によって、私なのだ！」と確信しているのが自我だからである。つまり、人間はこの自我を基盤（主人）にして生きて来た。

肉体人間としての「私」からの出発、これが人間の基本的な生き方であり、特に「人間（私）の理性の灯火を高く掲げて生きれば、この世に「平和（平安）」が漲る、と確信して近代の扉を開け猛進してきた。しかし、結果はより複雑な問題を生み、個人エゴ、企業エゴ、国家エゴ、民族エゴ、宗教エゴ、男女エゴ等々が次々生まれ、エゴによる悲惨な争いは後をたたず、自らの居場所としての地球を破壊するしかねない現状である。

とにかく、ヘロデは自分が直面した問題に、ただ「悩むだけだった」。この「悩む」と訳されている言葉は「手段を持たない」という意味である。つまり、ヘロデは問題に対し

て自我に縛られ、引きずられる生き方の手段しか持っていなかったのである。まさに、彼は、我見・我愛、我慢・我痴なる罪に生きる生き方しか知らなかったのである。だから彼はどれほど悩んだとて、そこから脱出できなかった。

ヘロデは、当時の大帝国ローマを相手に王としてその政治力に優れ、人間的な情もあり、知恵者でもあった。その意味で全くの悪人ではなかった。しかし、彼に決定的に欠けていたと思われる一事は、自我を越えた見えないものに対する畏敬の念の経験と自覚がなかったということである。

つまり、ヘロデは「私は、私でないから、私である」、即ち、「私は、私以上のものによって生かされている私である」という自己存在のエアリティーを経験し自覚することなく、彼は「私は、私によって・私である」というエゴイジムのな生き方しか知らなかった。

見えない神に対する「恐れ」は、自己保身の我痴の一種で、自我から生ずる我欲である。しかし「畏敬の念」は自己否定の精神の発動である。つまり、我を超えた大いなる命の開けと明るさに開眼させられた現場から、自然に生じる平安が「畏敬の念」である。

「見えない神がいて、お前を罰するぞ！」と言われて、神を信ずる者は、自己保身のための「我」の発動である。その人は神を「我」の貫徹のために利用した最大のエゴイストである。その類をイエスは「偽善者」と言った。そのような人は必ず「……のために」と

界を証示なされた。しかし「宗教」は、自我の宗教から「神」を説き、その神を人は信じ、それを信仰する。だからイエスはその自我が構築した信仰を捨てなさい。そうすれば、神の命の明るさの中にあなたは立つことになる、と言われる。(ルカによる福音書十二章一三節〜二二節・ヨハネ福音書三章一節以下参照)

—まえがき終わり—

この集いで、私たちが問いたいと願うことは、結局、この見える世界と、この世を超越した見えない神の創造的な大いなる命の明るみ、開けが、どのように関わっているのかということを、イエスの「平安」の立場から経験し自覚することによって、己の宗教的(信仰的)生き方を根本から見直したいということである。

二〇一〇年六月一〇日

松 下 昌 義

10

真つ当な自我・歪んだ自我

松下 昌義

「人多き 人のなかにぞ 人ぞ無き 人 人となれ 人 人となせ」 この詩にいつ頃出会ったのか思いだせない。が、当時、若年の私には印象深く今も思いの内に息づいている。わたしにとってこの詩は「人である」とはどういうことなのか、という「問いかけ」であつた。

人は、人として生まれたから「人である」と思い安心していいのだろうか。身近で起こる人と人のあいだの残酷な事件。世界各地で起こっている人々の悲惨な争い。これらのすべては人が起こしている。それは決して他人事ではなく、いつ自分が被害者になり、加害者となるかも知れない。否、大事件でなくとも人は日常の人間関係に於いて、すでに加害者になっておりながら、自分が被害者に成つたと思うときだけ加害者の相手を非難攻撃し、自分勝手にさわぎたてているのかもしれない。動物の種のなかで、同種が殺戮し合うのは人間だけだと聞いているが、いったい、人（自分・人間）とは何者なのだろうか。

人は、善い意味でも悪い意味でも「ここまでやるか！」と恐ろしくなる。これが人であり人間の現実である。それほど「人であること・人間であること」の存在は深淵である。＼きれいご

と「や」たてまえ「ですまされないのが、人が生きるといふことである。

悪い意味での、「ここまでやるか！」という例を、特に新約聖書福音書の中でみるなら、その出来事の一つが、宗教的権力の独善と陰謀をもってローマ軍に引き渡し民衆の目前でイエスを十字架刑で惨殺したユダヤ教の宗教教団とその祭司達である。

今一つの出来事は、私的な不義を指摘した聖者バプテスマのヨハネの首を斧で切り落とし、外国の高官達との宴席で、その首をさらしものにした、ヘロデ王とその妻と娘らの酷薄とその非情さ。

これらの所業、イエスの場合は、律法主義（原理主義）的ユダヤ教とその神殿体制の権力維持のための独善と排他的な祭司達の宗教的エゴによるものである。

バプテスマのヨハネの場合は、まったくヘロデ王とその妻と娘達の個人の欲望と偽善的な権力行使のエゴによるものである。つまり、これらの所業の起因は全て「自我」にある。

一方、善い意味での「ここまでやるか！」という例を福音書に見るなら、その出来事の一つは、十字架刑で惨殺されながら、惨殺する祭司達等とそれに踊らされている人々のために「神よ、彼らをお赦してください。彼らは自分が何をしているのか気づいていないのです」と祈られたイエス。今一つの出来事は、山賊に襲われ、身ぐるみ奪い取られ瀕死の状態で倒れているユダヤ人を見て「あわれに思つて駆け寄り」物心ともに最後まで助け切つたサマリヤ人。当時、サマリヤ人とユダヤ人との間には宗教的に敵対関係にあり、個人レベルに於いても完全にその交わりは断絶し

ていた。その徹底性は、互いに相手の土地には入らない。勿論言葉も交わさない関係であった。にもかかわらず、かのサマリヤ人は自分の商用のための旅であることも忘れ、また、宗教的、信仰的な関係も振り捨て、身に降りかかる危険も省みず、ただ、倒れているその者と一つになって、最後まで手厚く助け切ったのである。

イエスの場合も、サマリヤ人の場合も、その行為は安っぽい感情による演技的なヒューマニズムではない。また、宗教的、信仰的な教条的倫理や気分的な隣人愛などではない。これらの徹底的な愛の所業はすべて彼らの自我に起因する。

以上のように善悪に関わらず「ここまでやるか！」という所業を生み出すのが、私たちの「自我」であることを知っておくことは大切だと思う。

さて、人であるということは心身的（人格的）に自我意識を持った存在である。そのような存在が人間であるという意味で、智者も善者も愚者も悪者も皆同じレベルに居る。

自我意識を持っているのが人間であるなら、それ自体は悪でも善でもない。むしろ、自我という意識は人間にだけ備わった神の賜物（創造に於ける自然）なのである。だから、「自我を捨てよ！」などと言うことを軽々に自分にも他人にも言ってはならない。自我を無くした人間は、もはや人格としての人間ではない。

人は「ただ動くもの」ではなく、言葉を持ち、考え、感じ、判断し意志をもって行動すること

で、さまざまな経験をして意識的に生きている者である。そのように生きている当の「われ」が「自我」である。つまり、「われ思う ゆえに われ有り」(ルネ・デカルト)という人間に於いての命題の「われ」のことである。その意味で再度言うが、人間は人格を持った自我的存在であつて、それ自体善でも悪でもない。

先に「自我の様態」について、「ここまでやるか！」という事件を福音書の中から二通り紹介した。何れも「自我意識」に起因する出来事である。

にもかかわらず、あたまから「自我は悪である！」と、決めつけ、痛めつけ、否定しようとするなら、その人の自我が未熟だからである。つまり、自分にとつて自我の何たるかを、良く弁えていないからである。特に「宗教信仰」に於いて軽々に「自我否定」とか「自己否定」とか「自分を捨てる」というような言葉が、美德として観念的に教会に定着しているように思う。しかし、そうした教条的に作られた観念信仰にはおおきな問題がある。

キリスト教の場合、例えば「わたしについて来たい者は、自分を捨て(否定して)自分の十字架を背負つて、わたしに従いなさい」(マタイ一六・二四)とイエスが命じられた言葉を「自我を捨て・自我を否定せよ」という命令言語だと解釈した信徒は、自分を押し殺し、愛に生きることが、神と人との前で義しく生きる人間の在り方だと固く信じ、ひたすら自己犠牲の生活に励もうとする。しかし、当人はそれで「なつとく」し不安や葛藤は全く無いのだろうか。ひよつとすると、自己犠牲に励む自分の姿に、ひそかな誇りと慰めを得て生きるナルシシズムの穴に落ち込

んでしまつてはいないか。又は偽善的なあり方に届直つて、本当の自然に属する自我に無感覺になつてしまつてはいないだろうか。善し悪しは別にして、教師や信徒に関係なく、そのような熱心で善良な信仰の人？がおいでになり、当人たちは一向に、そのような自分に気づいていらつしやらないように思う。

大切なことなので、ここで先に言っておきたいことがある。それは、自我の問題は、その者の自我が十分に成熟することに於いて自覺的に生じて来ることであつて、未だ己が自我が成熟していないのに、自我の問題をことさらに持ち出し、「自我は悪だ！人間は罪人だ！」と軽々に教え込まれてしまうなら、その者は結局、自我の自覺も自我の克服も出来なくなる、ということである。

例えば、自我が未成熟のままの人が、「人間はすべて罪人ですよ！」などと、さも大真理を發見したように軽々に振りかざすのを聞くが、それは、その者の超自我が「そのとおりです」と簡単に認め大真理に気づいたように自我が思い込み、以後その者にとつて、それが一種の独善的な精神的な傷（トラウマ）となり、結局、大人へと成熟出来ずに歳を重ねてしまいかねない。

事実、このような善良？なキリスト者がおいでになる。そのような人は、ときとして頑迷で、一途で怖いものならず、そして微妙な美的感覺が欠けており、教条的・原理主義的自我の枠から開放されていないように感じる。したがつて、こういうお方は、ああでもなく、こうでもない。しかしこうでもあり、ああでもある。といった物事の多義的な深さの視点に立つて落ちついて考へ、語り合うことができない。一義的な生の狭隘きょうあいの人となる。

さて、自我の問題はどこにあるのか。個人的な一般論としてみると、それは自我意識をその者の生に於いて、どのように位置づけるかにあるのではないだろうか。

「私は私である」というのが一般に自我意識だと思う。しかし、それは自我意識の一面である。もしそれが自我意識のすべてだとすれば、次のような自我意識となる。即ち「私は、私によって私である」また、「私は、私以外の私では絶対でない私である」と。これはまことに強烈な自我意識であり、強烈な自尊心である。強烈な排他的独善意識である。徹底した自己肯定の自我意識、自我主張である。このような自我意識を「歪んだ自我」という。「歪む」とは、本来の形が崩れている姿のことであり、本来の自然に属する自我が崩れているということである。

「『人間』という語は、昔『社会』という意味であつた」という文章を、青年時代に和辻哲朗氏の「人間の学としての倫理学」という書物で読んだことがある。たしかに「社会」とは人と人との間（関わり）に現成してくるものである。

つまり、「社会」があつて、人間がその場に入るのではなく、人と人とが相互に関わるそこに「社会」が現成するのである。これが人間が存在する基本的なことである。だから世界の成り立ちについて「はじめに関係があつた」と言われるのだ。

ここで先に語ったことの再確認をしておこう。

「私は私である」「私は、私によつて私である」「私は私以外の私ではない」という自我意識は、自我の一面であつて、自我の全てではない。そのような自我意識をもつた人間の集まりの場は必然的に、自我と自我とのぶつかり合いの修羅場となる。したがつて、その場からは、平安で幸いな家族も家庭も社会も国家も世界も決して生まれては来ない。このような自我は「歪んだ自我」、つまり、本来の自我が歪んでしまった自我である。

では、本来の自我つまり生の本来の、「真つ当な自我」とは何か。ということを描べる前に、「歪んだ自我」についても少し見つけてみようと思う。

歪んだ自我は徹底して自我主張をする。そのためには、自我は自我自身を脅かす一切を悪と決めつけ排除し否定する。外部に対しては勿論、自我自体を根本から揺るがす自然な本来の内的生の促しに対して否定的になる。というより抑圧して自分の無意識の暗闇の中へ埋めてしまい、自分は正しいのだと自我の正当性を主張する。

しかし、こうした歪んだ自我の醜悪さは、自分にとつてマイナスの価値と認めて無意識の暗闇に埋め込んだ「それ（影）」を、他人の中に見いだして、その他人を徹底的に攻撃することで、自分の内なる不自然な不安を正当化して、悪いのは「あいつ」で「わたしは」正しい、と自己防衛をはたすのである。これが「歪んだ自我の醜悪さ」である。このような自我の働きをユングは「投影」と言った。

このようなことは、世間では日常的に行われているが、最近、私の目前で起こった個人の言動は、典型的なそれであり、とても衝撃的で印象深い一例であった。勿論、当人は、投影的行為を、自覚しておいではならず、固く自分の正当性を確信し、ますます相手を批判し否定することに正義感をお持ちになつておられるだろう。と自省しながら思いめぐらしている。

それはともかく、先に紹介した福音書の出来事の一つを例として取り上げるなら、例えば、ユダヤ教最大の預言者モーセーを通して与えられた律法を唯一絶対の神の言葉と信じ、その文字を遵守する生き方、即ちユダヤ教律法主義的信仰の問題性をイエスは信仰の根源から鋭く指摘した。しかし、ユダヤ教団と祭司たちは、そのイエスを神に対する悪魔的な逆行行為とみなしイエスの弟子イスカリオテのユダを金であやつり、彼の先導で真夜中にイエス達の居場所を急襲しイエスを逮捕した。そしてローマ軍の手で、神の名（権威）によつて十字架刑でイエスを惨殺した。イエスがそのとき、最後に残された言葉は「彼らが、自分が何をしているのか気づいていません、神よ、彼らをおゆるしく下さい」であり、その言葉が証示する内容はとても深い。

「歪んだ自我」の「歪み」の特徴の一つは、自我を中心にして身の回りの者を善悪の一義的価値で決めつけるところにある。つまり自分と同じであれば味方であり善であり、自分と異なれば敵であり悪とする、所謂、自我と同じ価値体系の内にあるものだけを善とし仲間として認める自己同一性に強固に生きている。その生きかたを先に、独善的、排他的、自尊的などと言った。まさに、イエス当時のユダヤ教の律法（聖書文字）主義宗教は、その典型であつたと言える。（主

義主張に生きる人にこのタイプが多いようである)

だからこそ、彼らは、自分たちと異なるイエスの神理解や信仰理解、宗教理解は悪であり敵であり、自分たちの神の名によつて必ず抹殺しなければならぬ「悪」又は「悪魔」だったのである。

これは、「歪んだ自我」による信仰がもたらす彼らの必然的な帰結であり、したがつて彼らは、自分たちは正しいことを行つたと確信しているのである。その意味で「歪んだ自我」は極めて一面的な価値判断しか出来ないものである。その独善と排他と一面的な価値判断しかできない自我の歪みに「気づいていない」とイエスは哀かなしまれたのである。

それにしても、イエス当時、ユダヤ教教団と祭司たちは、イエスの痛烈な批判に不安を覚えていたのではないだろうか。

当時、律法を遵守して生きる余裕があつたのは、人口の一〇パーセントの特権階級の人々だけだつたと言われている。そして、祭司達は律法を守れない多くの人々を「アム・ハアーレツ（塵の民）」と呼び軽蔑けいべつしたのである。その意味で、人々（民衆）は宗教人としての祭司達から遊離していた。しかし、祭司の中にも、自分たちのあり方に不安を覚えている者達がいたようである。例えば、イエスのもとへ夜密かに訪ね、教えを求めたユダヤ教の教師ニコデモなど、その代表的なひとりであろう。また民衆たちの多くはイエスを敬愛し、イエスの話に耳を傾けた。ある人達

の多くはイエスの後を追ひ、ときに、食事することをも忘れる程であつた。その理由はどこにあつたのだろうか。

福音書はイエスについて次のように記している。

「人々はイエスの教えに非常に驚いた。律法学者（ユダヤ教の教師）のようにはなく、權威を身につけている者としてお教えになつたからである」（マルコ福音書一章二二節）

当時のユダヤ教のセンセイは、上述のとおり、聖書の文字を即神の言葉として遵守する生活を最も大切な事として教えた。そして、その聖書の文字の最も正しい解釈者が律法学者であり、その解釈に基づいて、人々の日々の生活を指導し祭儀を行うのが祭司だつたのである。

ユダヤ教の祭司センセイたちは、体制化したユダヤ教で人々を聖書の文字と祭儀で日々の生活を縛り閉じ込めようとしたのである。おえらい、祭司サマたちの教えは、極めて教条的原理主義的であつて、人々（民衆）の、生の現場と内面へは届くことはなかつた。

しかし、イエスは、天の父ちゃん（神）の愛と恵みの働きが、どの人にも及び、生かされていくのが「あなたなのだ！」と、ひとり一人に語りかけた。そしてご自分の手と足と眼差しとで直接、且つ具体的に、その事実を証示なされたのである。それは、人々に平安と生きる勇氣と希望とに与らしめると同時に、一切の束縛からの開放であつた。

事実、人々はイエスに接して「非常に驚いた」とあるが、この「驚く」とは、「喜びで仰天ぎょうてん」

する」という意味である。そしてこのようなイエスを、ユダヤ教のセンセイのようではなく「權威を身につけた者のよう」と直観した。その意味は「何にも縛られ限定されず、本当の命の開け（自然）に生きている者」という意味を含んでいる。

いったい人々はイエスに何を見たのだろうか。皆さんはどのように思われるだろうか。この一点はとても大切なことだと思う。

人々がイエスに接してびつくりぎょうてんし「何ものにも縛られず、本当の命の開けに生きている者のように」感じたそれを一口に言えば「天然自然のように」ということ、即ち、「天（神）の然りを自ら然ること」、つまり、「自我を超えた神の働きを素直に行じている者のように」ということである。

自我は自分勝手な善悪の価値を作り、その価値体系に捕らわれて自分の生の在り方を自縛する。その意味で自我からの発想は必ず「不自然さ」がともなう。不自然さは自我の力みであり、自我のつっぱりであり、原初的な命の促しの生―創造に於ける人間の自然的生の内容―から逸脱した在り方である。そこに於ける生には真の平安はない。

イエス当時のユダヤ教の律法（聖書）主義、特に熱烈律法文字遵守主義者のフアリサイ派の信仰者達は、結局、神のご意志に生きると言いながら、自我の価値体系を律法（聖書）の文字に

読み込み、それを神の御意志だと信ずる決定的な思い違いを犯してしまった。これについて、使徒パウロは、以前フアリサイ派の中のフアリサイ人と自認していた頃の自分を思い出しながら、次のようにその宗教信仰の誤りを指摘している。

「私は彼らが救われること（本当の命に目覚めること）を願ひ、彼らのために祈っています。私は彼らが熱心に神に仕えていることを証しますが、この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません。なぜなら、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかったからです」（ローマの信徒への手紙一〇章一節〜三節）

結局、ここで言う「不自然さ」とは、自我が生み出す価値体系（自分の義）であり、一方「自然さ」とは、自我を超えた神の創造的な大いなる命の開け（神の義）のことである。

とすると、「不自然さ・歪んだ自我」を（１）とし、「自然さ・自我を超えた神のはたらき」を（２）とすれば、（１）と（２）とは対立関係ではなく、（２）が（１）を包み（１）が（２）に抱えられている関係なのである。これをイエスの、パウロ的な発言をすれば（１）は（２）の内にあり、（２）は（１）の主体として働いている関係なのであると言える。この事については別項で述べるので、ここではこの項にしたがって以下進めることにする。

先に、イエス当時のユダヤ教のセンセイ達の中には、自分達の律法主義的求道に不安と葛藤^{かつどう}、

つまり、不自然さを感じている人達がいるのではないか、とニコデモを例にして述べたが、その不自然さに気づき、自我を超えて自我を生かす神の大きい命のはたらきを経験し、自覚開眼、回心したのがパウロであった。そのときの経験と自覚の生の内容を彼は次のように告白した。

「生きているのは、もはやわたしではありません。キリスト（自我を超えて自我を生かす大いなる命のはたらき）がわたしの内に生きて（はたらいて）おられる」（ガラテヤの信徒への手紙二章二〇節）

「わたしにとって、生きるとは、キリスト（大いなる命のはたらき）である」（フィリピの信徒への手紙一章二一節）

しかし、多くの自我同一化した者は、自我が構築した価値体系に一瞬それが不自然ではないかと感じたとしても「自分は決してそのような悪人ではない！」と固く思い込み、それだからこそ余計に、不自然ではないかと感じたそれを排除し、自分の無意識の中へ投げ込むことで自我の正当性を合理化し、安心する。だが、それだけではおさまらず、無意識の中に投げ込み隠した不安をもたらしすそれ（影）を、他者の誰かに投影して―イエス当時のユダヤ教団や祭司達はイエスの言動に投影して―徹底的に攻撃する。その攻撃の凄まじさは、イエスの場合、十字架刑での惨殺だった。これこそが「歪んだ自我」の恐るべき現実である。

結局、先にパウロが語ったとおり新約聖書に登場するユダヤ教のセンセイ達の宗教や信仰は

(本来のユダヤ教という宗教がどのようなものであるかはともかく) 所詮は「歪んだ自我」が生み出した虚構だったと言える。イエスは当時のユダヤ教のセンセイ達に、この一点を見抜き、彼らの信仰や宗教に根源的な命の欠落を厳しく指摘された。

「禍いだ、お前たち律法学者とファリサイ人よ、偽善者どもよ。お前たちは、人々の前で天国〔の扉を鍵で〕閉じてしまうのだ。お前たちは自ら入ることをせず、入ろうとする者達をも入らせない。」

「禍いだ、お前たち律法学者とファリサイ人よ、偽善者どもよ。お前たちは海と大陸を駆けめぐって、一人でも改宗者を作ろうとする。そしてうまく行った時は、彼をお前達に倍するほどの地獄の子にしてしまう。」

「禍いだ、お前たち盲目の道案内人よ。……愚か者どもよ、……蛇よ、まむしの裔すえよ……偽善者どもよ。……」(マタイによる福音書二三章一三節以下参照)

イエスが言う「禍わざわいだ！」とは、「ああなんと悲しいことよ!」「ああなんと可哀そうなことよ!」という意味の言葉であって、単なる攻撃だけの言葉ではない。

彼らの熱心な求道心や信仰心は、パウロ的に言えば「神の義(神のご意志)」を知らず単に

「自分の義（自我中心）」から出たものに過ぎない。つまり、彼らの最大の誤りは、神の本当のはたらきに心身で開眼し、自覚しないまま、律法（聖書）の文字に忠実に生きることをもって「神を知った」と自我の価値基準で判断したところにある。つまり、彼らは律法（聖書）が証示する命のリアリティーを経験し自覚しないまま、律法（聖書）の文字を神の言葉と同一化して、絶対化したその文字を信仰的生の出発点とした。それはまさしく、自我の価値判断による価値基準の設定に他ならない。だからイエスは、次のように指摘なされた。

「あなたたちは、聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが聖書は、わたし（大いなる命のたぎり・はたらき）について証示をしているものだ。それなのに、あなたがたは、真の命に与るためにわたしのところへは来ようとしなない。」（ヨハネによる福音書五章三九節以下）

パウロも次のように言う。「（聖書・律法）の文字（の自我による絶対化）は人を殺しますが、霊（自我を超えた大いなる命のはたらき）は（人を生死を超えた命に開眼させ）生かす。」（コリントの信徒への手紙Ⅱ三章六節）

このような「律法主義・原理主義」的生き方から開放される為には、歪んだ自我意識の向こう側に、自我意識をまる抱えして、はじめからたぎりつづけている大いなる命の世界の開けのリアリティーに開眼する経験と自覚を体得することである。この自覚へ導くのは自我の努力ではなく「聖霊のはたらき」、つまり、大いなる命の開け、たぎり、はたらきにより、自我の絶対化を徹

底的に相対化（無化）せしめられ、大いなる命の開けに開放させられる経験だけである。このような経験と自覚にあずかったエックハルトは、次のように告白した。

（自我をもつて）「神について一切、口を開くな。神について語るならば、それは虚言である。自我をもつて神について語れば語るほど、神から離れる」（「エックハルト」——上田閑照——）
エックハルトが、この一言で何を証示しようとしたのか、私なりにハッキリと見えてくる。しかし、当時のローマ・カトリック教会は、その絶大な世俗的組織と権力により、彼を異端者として破門した。所詮、「歪んだ自我意識」から生み出された「宗教」は、この程度のものである。それは、イエスを悪魔の頭として惨殺した「宗教」と同じである。このような「宗教」の流れは、現在も基本的には少しもその体質は変わっていない、と感ずるのだが、皆さんはどのように思われるだろうか。

意識的な自我の働きなくして人は人としては生きられない。だから軽々に「自我を否定しなさい」などと、言ってはならず、また、そのように軽々に「自我」を悪者呼ばわりする者は、当人の自我が成熟していない者である、と先に述べた。

意識的な自我は様々な仮面をかぶり、神や天使、そして悪魔にもなる。つまり、自我中心を貫徹するためには何にでも変身するのだ。神や天使になって人を欺き一儲けする宗教や宗教家」と称するのがこの世には大小合わせて無数に闊歩している。この場合、本当に問題なのは、その自我の仮面が偽りであることを知って、人を欺く者ではなく、その自我の仮面を本当の自分であると信じている、否、むしろ、それは世のため人のため、勿論、神の栄光のためである、と思い込み

疑うことなく、ただの教条を熱心に説き生きている者、この者こそ、厄介者なのである。

わたしは教典（聖書等）を学び、教えを忠実に守り、礼拝を行い、慈愛を行じ、日々誠実に生きています。という場合その自分の生き方に、自分では知らないままに陶酔するナルシストになつてないか、ということである。自我は、このような思いもつかぬ技を仕かけ、人を偽善の穴に陥める。このような落とし穴に落ち込む人の或る人達は、自我が十分に成熟していない観念的な理想主義者に多いように思う。これが「歪んだ自我」の実態である。

では、自我が成熟する、とはどういうことなのか。それは、自我を超え包む大いなる命のたぎり（はたらき）に開眼すること、自我の限界を経験し自覚することである。そのとき、自我は相対化される。この状況がある人は「限界点即自由」と言い、ある人は「虚空／世界」などと、少し難しい言い表しをなさるが、それを、ひとつの例で言うなら、次のような事ではないだろうか。例えば、柿の木に柿の実がなり、その実が成熟してゆく場合、その柿の実が成熟しきつたとき、その実はやがて、枝から離れ、大地に落ちるだろう。そして、大地に落ちた（死んだ）柿の実は、頼れ大地に溶け込み、大地の命に育まれて芽を出し、成長して行く。まさに「成熟する」とは、柿の実際の限界に於いて大地に全存在を投げ出すことによつて、新しく芽を出す事なのである。柿の実が、いつまでも枝に留まり、その柿の実であろうとするなら、その柿は新しい命に芽ぶくことは出来ない。

自我が成熟し切る、という事は、自我を大地である大いなる開けの世界、創造的な大いなる命

のはたらきの世界・場。すべてを包み育む創造的な大いなる命の場・世界に投げ込み、自我を超えた虚空（底無し）の無限の開け）の大いなる命がたぎるはたらきの中へ死に、溶け込み、新しい命として芽を出させていただくことである。その意味で、「限界点即自由」とは、まことに的確な表現だと言える。また、「虚空／世界」という表現も、この世（世界内）に生きる人間の本来的な在り方を表言している。また同じことを、他の方は「自己／自我」と言う。さらに「絶対矛盾的自己同一」「超個の個」「対立の一致」などと、それぞれが真摯に且つ厳密に求道することで見出した人間の実存のリアリティーを、その人自身の整った言葉で表し（命題化）た。その意味で、それらは決して難しいただの理屈ではない。

ちなみに、私はわたしの器量で、「創造に於ける人間の自然」「真つ当な自我」などと称している。

イエスはこの間の消息を次のように証示された。

「一粒の麦は、地に落ち、溶け込み、死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」（ヨハネによる福音書一二章二四節）

このイエスの証示は深く重たい。

なお、ここで思い出すのは、道元の次のような提唱である。

「ただ我が身をも心をも放ち忘れて、仏（大いなる命）の家に投げ入れて、仏（大いなる命）

の方かたより行われ、これにしたがい持もてゆくとき、力をも入れず、心をもついやさずして、生死しよせいをはなれ、仏（大いなる命）となる。たれの人か、心（自我）に執着しているものがあるか。「
（正法眼藏・生死の巻）

自我の限界を経験し自覚しないままで、神や信仰、罪や救い等の「宗教の教義」を振りかざしても、それは所詮、自我意識内の観念的で独善的な信仰・宗教であり、自我意識がつくり出す幻想にしがみついているだけのこととなる。そのような「宗教信仰」には真の平安にあずかることはない。（マタイによる福音書七章二一節～二三節参照）

だから、イエスは「自分の持ちものを一切捨て切つてないならば、あなたがたの誰一人としてわたしの弟子ではありえない（わたしが与える命に開眼出来ない）」と言われた。（ルカによる福音書一四章三三節）

ここで「一切捨てきる」とは「完全に別れを告げる」という意味である。また「自分の持ちもの」とは、「自我から発想する自分」のことであり、その自我意識に生きる自分に「完全に別れを告げなさい」と、イエスは証示されたのである。このイエスの証示を注解するかにようにエックハルトは次のように語る。

「自分の財産（物・行い）をどれほど他者に施し、捨てたとしても、その人が自分自身（歪んだ自我）を保持しているなら、その人は何も捨ててはいないのである。」

この項の主題は「真つ当な自我・歪んだ自我」とは何か、と言うことであるが、結局「歪んだ自我」とは、「私は私によつて私である」という自己同一に留まり、その「私」を絶体化し、他を排除し、独善を貫徹する生き方、有り方の自我のことである。一方「真つ当な自我」とは、「私は私を超えた大いなる命によつて私以外のものとの関わりに於いて私として有らしめられている私である」という事態であり、歪んだ自我の自己同一性が破られ、超えられ、相対化させられ、超個の個を自覚した自我のことである。

その意味で「歪んだ自我」の在り方は極めて不自然であるばかりか、そのような独善的で排他的な生き方、有り方の個は現実の世界にはどこにも存在しない。この世の全ての個は、他との関わりに於いて個としてあり得るよう超越的な定めに在る。この存在の秘儀に開眼し自覚している個（自我）が「真つ当な自我」の在り方、生き方、したがつてそれは極めて自然で現実的な生（存在）の内容なのである。重ねて言うなら、「真つ当な自我」とは、「自我」を超えて働く大いなる命の開けに開眼するときに同時に現成する自我なのである。

しかし、私達の日常の在り方、生き方からは、「自我」を超えて働く大いなる命の開けは隠されて見えない。見えるのは「歪んだ自我の様態」だけである。つまり、自我を基盤にしたさまざまなる人の計らい―科学、思想、政治、倫理、経済……そして「宗教」までもが排他的独善と化して互いに自己の真理性を主張して争っている。しかし彼らは、それが「歪んだ自我」から起因し

ていることに気づこうとしない。なぜなら、彼らは自我を超えて全てを包む大いなる命の開けの靈的リアリティーを経験し自覚してないからである。つまり、自分の全存在を支え包みはたらく大いなる命に目覚めた「目」を持っていない、ということである。

だから、イエスは証示して言われた。

「身体の灯火は目である。もし、あなたの目が真つ当なら、あなたの全体は輝いているであろう。しかし、あなたの目が歪んでいれば、あなたの身体全体が暗闇であろう。そこでもし、あなたの中の光が闇であれば、その闇はどれほどであろうか—ああなたと恐ろしく哀しいことよ！」（マタイによる福音書六章二二、二三節）

大いなる命のはたらきの開けのリアリティーこそ、靈的、かつ宗教的なるものなのに、それに開眼し自覚していないなら、それは、ただの世俗的な歪んだ自我が生み出した宗教風の幻想と虚構の闇にさまよっているだけになるのではないだろうか。

イエスは当時のユダヤ教団とその祭司達の宗教体制に組織維持、権力維持のためだけに走る宗教の偽善を見抜いておられた。だからこそ、終生神のみ旨を語りつづけ、最後に殉教した預言者イザヤの叫びを、イエスは彼らに投げつけられた。

お前たちはいくら聞いても、悟らない。また、見るには見るが、認めない。

なぜなら、この民の心は鈍感になった。そして彼らの耳は遠くなった。

また、彼らは自分たちの目を閉じてしまった。その結果、彼らは目で見ることなく、耳で聞くこともなく、心で悟ることもなく、立ち帰るといふこともなくなり、また私が彼らを癒すこともなくなるのではないだろうか。

(マタイによる福音書一三章一四節〜一五節)

いつの時代にも「宗教や信仰とその集団」は、存在の芯、人間の芯、宗教や信仰の芯を見失つたまま、目に見える教義やこの世の事態に振りまわされ、それを追い、保持し、固執すること、自らを暗闇に陥ち込んでしまう危険性と同伴していることを忘れてはならないと思う。そこにあるのは「力みと不安と争い」だけで、「平安」はない。なぜなら、彼らは「徹底した放下（捨てること）の平安」を知らないからである。

★追記

この文章は、去る六月十二日に開催された「一日あごらの集い」のときに、用いたテキストのつづきの一部として記したものです。

なお、この文章の続きと合わせて、来る一〇月一〇日〜一一日に開催される第十三回「あごらの集い」のテキスト冊子として完成する予定です。